

---

# 時 報

---

No.7

1956.1

大阪大学山岳会



## 時報 第七号 目次

- |                            |         |
|----------------------------|---------|
| ▣ 卷頭言 ▣ 新卒業部員諸兄へ           | 徳 永 篤 司 |
| □ より高き山へ<br>——一九五三年度を省みて—— | 川 島 勇   |
| □ 冬山鹿島槍東尾根合宿               | 坪 井 圭之助 |
| □ 春山合宿                     | 宍 戸 元   |
| □ 春山合宿食糧報告                 | 木 村 裕 一 |
| □ ナイロン二号テント製作報告            |         |
| □ 山行記録                     |         |
| □ 集会記録                     |         |
| □ 編集後記                     |         |
| □ 会員名簿 (省略)                |         |

# 新卒業部員諸兄へ

徳永篤司

先ず長い現役時代を通じて登山に精進せられて来た諸兄の見事な足蹟に敬意を表し度い。現役時代の登山は固苦しい部の合宿という枠の中に入って決して楽しいというものではない。たまには一シーズン位自分本位のパーティで山へ、スキーへ行き度いという誘惑に駆られた事もあったと思うけれども、それを退けて最后迄第一線のパイオニア・ワークを続けて来た記録は貴い。この四月で諸兄は第一線から退くけれども、本当の山登りはこれから始り、本当の登山家としての生活はこれから始る。楽しい山行——生活の中に融け込んだ——をこれから十分に楽しんで頂き度いと思う。社会に出て職を持ち、結婚でもすれば三年や四年全く山と縁が無くなってう場合も十分に考えられる。しかし山へ行かない登山家でも良い。仕事の上でも、例えば闘病生活という様なものに於ても登山というものはあるからである。

一方、私達の部も部員の活動に依って組織が保たれていた初期の時代は了った。一つの有機的な組織という面から、部は現役とOBの二つの下部構造に依って支えなければならない。新入部員が上級部員にスムーズに育ち、適切な登山計画が四季に亘って持たれるなど、現役の自主的活動が充実して来るに随って「先輩」の立場と任務が大きくクローズ・アップされて来るのは当然である。過去に於ける東西各大学山岳部の消長の歴史は私達に「先輩」団の在り方と云うものに就て色々な事を教えてくれた。ある山岳部では毎週の集合のイニシャチーフを完全に先輩団がとり、昔の華やかな夢を追う雄大な計画がでっち上げられた。現役の一部で弱い非難があつたが大勢は勇ましい方に随った。しかし実際に山に出発する間近くになって例の如く先輩団に故障が続出し、計画は現役を主として実施された。結果は誰の目にも明らかな如く失敗し、遭難しなかつたのがせめてもの幸という有様であつた。計画失敗の後、先輩達は前程熱意をもって集合に出る事はなくなり、その後数年の間、部は沈滞してしまつた。又、別の山岳部の例をとってみよう。威勢の良い若い先輩達が例に依ってヒマラヤを標榜して現役をけしかけた。計画は全て極地法でなければならないし、装備は全てナイロンでなければならない。穂高であらうと剣であらうとそれはどうでも良い。唯、山はヒマラヤに行く為の道場でしかなくなつた。その部は急に活気に溢れ、忽ち指導的な地位に立ち、内地遠征も成功した。しかし遠征が具体化しないまゝに数年経つた。初め鮮やかであつたヒマラヤという旗印は次第に色褪せ、最早現役はこのスローガンの下に鼓舞されなくなつたのである。その部はやがて沈滞し始めた。これ等のイソップ物語は枚挙に暇がない程私達の身近に存在する。とりわけ部を一番そこなうものは

遭難の発生である。遭難は避けられ得る。がしかし百%避けて通る事は不可能である。この事は既に幾多の経験を積んだ諸兄は充分認めて居られると思う。私達の山岳部だけが例外と成り得ない以上遭難防止と云う事は来る年、来る年誰れもが頭に刻み込んでおかねばならぬ最大の運動方針である。遭難を防ぐ力は実際に働く部員よりも先輩の側にある。この為に OB は計画を検討してやらねばならないし、破れたテントを持って稜線へ上らぬ様に寄附を募ってやらねばならない。

要するに、現役の活動にどの程度タッチしてゆくのが良いのかという課題を、論議の上ではなく実際の仕事の面で解決してゆく事が私達の当面の問題となって来たのである。先輩というものは従属的なものである。卒業して 年も経って来ると何時の間にか現役に教えて貰い、刺戟を受けて動いている自分というものに気付くであらう。主体性のある伸び伸びした山岳部を築き上げる為に、特に現役と接触の多い新卒業部員諸兄の役割に大きい期待を持つ次第である。 (一二月二十二日)

## より 高 き 山 へ

—— 一九五三年度を省みて ——

川 島 勇

こゝ数年来我々が主目標として来たものは積雪季（三月）に於ける後立山の全縦走であった。

一九五〇年三月、第一回の計画を立てられたが、新制及旧制学生の学年末試験がずれた為全部員が集結出来ず、六人のメンバーによって八方尾根より鹿島槍を往復するに止まった。翌五一年三月には、九名のメンバーによって針之木より白馬迄の逆縦走が企てられたが、不幸にも針之木岳でアクシデントを起し計画を中止しなければならなかった。アクシデントを機として計画自体が強く反省され、その結果翌五二年三月には一歩退いて、家田リーダー以下八名のパーティで小日向より杓子—唐松への極地法登山を展開した。この山行は、山行自体特筆すべきものではなかったけれども、之が我々の行った最初の完全な形の極地法登山であり、我々がこの山行で多くの事を学び取った云う点で大きな意義のある山行であった。翌五三年三月に行われた後立山逆縦走には、この時のメンバーの中、家田リーダーを除く七名が参加して各々重要な役割を果し、計画を成功に導いたのである。

私が、予期していなかったにも拘らずチーフリーダーになったのは、こうして一応問題が解決された直后であった。喜びと虚脱感が我々の心を占め、一方に於ては或種の解放感があった。今迄の我々には嚴然とした主目標というものがあつた。それは、いはゞ物心ついた時から既に存在したものであつて、半ば義務づけられた目標であつた。解放感というのもそういう所から出て来たものであらう。しかし、次に我々は何をすればよいのか。突然開けた眼の前の広さに戸惑を覚えたのである。

より高き山、より困難な山、未知なる山への憧憬と努力こそは私自身の登山の本質をなすものであり、私を困難な登攀に駆りたてる原動力であつた。一寸した気の弛みが決定的な致命傷になる様な烈しい登攀にあつても、その一瞬一瞬が私にとっては喜びであり、未知の山稜や溪谷を、前途に対する不安と処女地に行く楽しさを味わいつゝ進む時も、同じ喜びを感じていた。

昨年の私にとってより高き山とは冬の主稜線を意味していた。そして又、春の主稜線上での行動に自信を得、南ア及中アでの冬の稜線を味っていた我々が、次に進むべき道も冬の主稜線であつた。こういう論理的帰結の外に、私を強く冬の稜線に魅きつけたものは、北岳や木曾駒で味つたあの美しくも荒涼たる冬の稜線の持つ強烈な魅力であつた。寒気、風、冷やかな太陽。普通の人間にとって一つとしてよい所のない冬山の稜線の、どこに私を魅きつける力があるのだらうか。しかし、そこには純粹で峻烈な自然があり、我々がすべてを忘れて全力を投入出来る何物かがあつた。

とまれ、リーダー会は私の考えを容れて、例年になく冬山に主力を注ぐ事になった。合宿地としては、冬の休暇が短いという関係もあつて、天氣の比較的良い穂高、聖・赤石、鋸岳及中アが候補地として挙げられたが、夏山迄に決定することは出来なかつた。

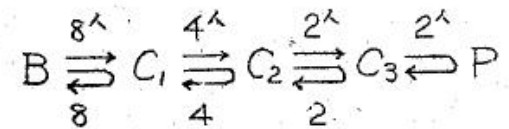
夏山合宿も問題であつた。従来我々の夏山合宿は、偵察を兼ねてその年度の主標たる春山合宿に関連した場所で行われるのが普通であつた。所が昨年は、主目標が冬の主稜線と云うだけで山そのものは未定であつた。一方私自身は、合宿地を穂高とか劔という人並な所へ持って行きたいと考えていた。カクネ里、こう云う所での生活は確かに素晴らしい。巨大な雪溪とそれを囲む岩壁山稜は我々だけのものであつた。誰に気兼ねなく登り、滑り、食ひ、眠つた。人間の踏跡の全然ついていない山稜は、緊張した登攀を要求したけれども、それはむしろ快いものであつた。こうした所での合宿は、新人のトレーニングには不向であるが、登山の本質的要素を多分に持つて居り、それ自体決して悪くはない。しかしこういう所だけを知つていて、人々がオーソドックス

な夏の穂高や劔を知らないのでは、偏食の誹りは免れない。こうした考えから、私が曾て真砂沢合宿に参加した経験のある事も与って、夏山は劔合宿と定めたのである。近来稀な大雨に遇って予定通りには行かなかったけれども、基礎的技術及体力の練磨、部員相互間の理解と親密の度を深める事、及将来の山行に備えての偵察と云う夏山合宿の目的は達せられたと考えている。

冬山が穂高と決めたのは夏山が済んでからであった。我々は穂高をよく知らない。しかし先人のトレースは至る所に印されて居り、穂高に関する文献は非常に多い。我々は文献によって得ただけの智識でどれ程の山行が出来るか、自らの力を試そうとしたのである。我々の条件は、製作予定のナイロンテントを含めて四人用テント四張、二週間の日数、及十四五人のメンバーであった。但しこの中、稜線上で行動出来るものは八人位であった。

三回に亘る秋の偵察と荷上の後、上高地から天狗のコルを経て槍岳迄足を伸ばす計画に最も魅力を感じ、之に検討を加えた。従来記録に従えば、上高地にBH、岳川の奥にBCを設け、ここから天狗のコルにC1、奥穂にC2北穂辺りにC3とテントを進め、さらに確実に行こうとすれば南岳辺りにC4を作らねばなるまい。之がポラーとしての常道の様である。しかし日数、装備、

人員の点で多くの制限を受けていた我々はこのまゝの方式を採用するわけにはゆかなかつた。我々にとってポラーは目的ではなくて一



つの手段であった。そして、登山がスポーツである以上登行速度も亦重要な要素になって来る。同一の山でも、同程度以上の安全性の下により早い登行速度で登らうとするならば、それはより高き山への道に通ずるといふ考えの下に独自の方式を採用したのである。一体テントを進めてゆく目的は、安全確実にしかも速やかにアタック隊を最前進キャンプに送り込む事にある。極端に云うならば、アタック隊が最前進キャンプで生活し、攻撃し、下山するに必要な食料装備等を荷上げしさえすれば、アタック隊以外は下山してもよい。今上図の如き極く単純なキャンプの進め方を考えると、キャンプ数と同じ行動日数で攻撃可能になるわけである。我々はこの考えに基いてキャンプ位置及ボッカ量を検討した結果、適当な人員配置をすれば、前述した我々の条件の下に上高地より槍岳を攻撃し得る可能性を見出したのである。即上高地をBHとし、天狗のコルC1、奥穂C2、北穂C3と一日に一キャンプづつを前進させるならば、穂高

の天候から考えて二週間あれば十分と見たのである。この場合問題になるのは、BH より C1 へのボッカ、C1C2 間のフィクス、及 C3 よりの最終攻撃であった。

岳川に BC を設けなくて、いきなり天狗のコルに C1 を設ける様な例は今迄にない。が、サポート及中継デポを利用すれば決して出来ない事ではなく且計画上有利であると考えた。我々の考えによれば、キャンプを四個以上連続して伸ばす事は各キャンプ間の連絡及ボッカ量の急激な増加と云う点からみて好ましくない。我々は天狗のコルを境として山行を二段階に分け計画を単純化した。第一段階の上高地から天狗のコル迄は、中継デポとサポートの援助によって一挙に百貫の荷を上げる。この場合、一人のボッカ量を五貫としてスピードに重きをおいている。C1 へのボッカが完了してから第二段階に入り、3つのキャンプと、8人のメンバーで3・2・3のフォーメーションのポラーを行う訳である。

フィクスについては技術的及時間的問題についてかなりの不安があった。もし之に手間取るなら計画は挫折するし、手を抜いてアクシデントを起せばそれこそ取返しがつかない。特に C1C2 間は通過回数が多いから注意しなければならなかった。

C1 の奪取と C1C2 間のフィクスが全計画の重大な山をなすものであると云う考えから先発隊を出したけども、之は考え方が甘過ぎた。先発隊は天狗のコルにも達しなかったのである。

最後の北穂の C3 から槍岳を攻撃することは無理とは云えぬ迄も困難は予想されたが、之以上テントを進める事は出来ない相談であったから強行した訳である。攻撃メンバーとして尾藤と私自身を選んだのは、この様なラッシュを行うに最も適したメンバーであると考えたからに他ならない。どちらか一人は後に残るべきリーダーが、二人共前線に出る事は良い方法ではなかったけれども、最終攻撃をより重要視する以上こうせざるを得なかった。強力な最終攻撃を行わない、又は行い得ないポラーは、ポラーの目的が十分な攻撃能力を持ったパーティを最前進キャンプに送り込む事にあるのを忘れていた。穂高近辺の記録の中には間々見られる事である。

この様に我々の計画はぎりぎりのものであったから、ボッカ量を少なくする為種々の方法を講じている。食料計画は無駄のない様に綿密に組立てられた為、計画終了後は余剰食料は殆んど無い程であった。特に装備については、C3 にナイロンテント及エアマットを用い、又四百米近いフィクスには十二耗の他に八耗、五耗のザイルを使用する等して不必要な重量を減らした。かゝる努力によってなされたボッカ量の減少こそこの計画を可能ならしめたものである。必要な装備を入手する為の資金集めも、戦后

途絶えていた OB との連絡をとる事から始めねばならなかったから厄介な仕事であったが、幸、先輩諸氏の理解ある御援助によってうまく行った事は全く有難いことであった。

こうして冬山が始められた。

悪天候の為先発隊が十分行動出来なかった事。C1 へのボッカの不手際な事。C1 での盲腸患者。C1C2 間フィクス作業の遅延。C2 の壊滅。アタック隊のビバーク。風雪中の C3 撤収と凍傷等多くのトラブルが生じたけれども幸いに切抜ける事が出来たのは、隊員の頑張りであった事は勿論であるが、多くの点で運がよかった事も否めない。

冬山が終わった時、我々はたゞ全力を盡したと云う感があるばかりであった。そして行動中常に我々を脅していたものは、机の上では巧妙に立てられた計画が、雪の状態については未知であり、又我々に不馴れな岩場の多いルートで果してうまく行くかどうかという不安であった。結果としては曲がりなりにもうまく行った訳であるが、この様な山行がいつも成功するとは決して云えないし、又良い方法であるとも云う事は出来ない。たゞ之は山の条件と我々の条件の妥協点をぎりぎり迄追求した結果見出された方法であり、やり方によっては登行速度を上げ得る事を示したものである。そして軽量のテント・ザイル等の出現によってこの傾向は益々強められて行くという事は云えるのではあるまいか。

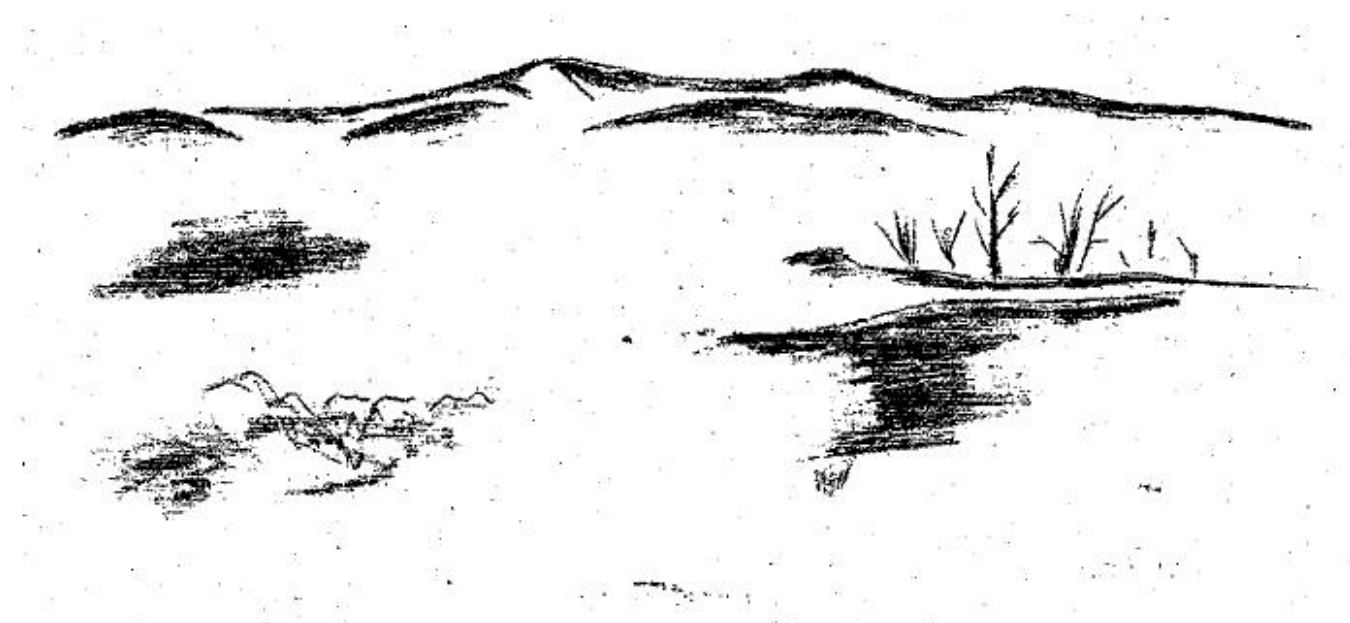
冬山直后には、あまりにも強烈であった山行の思い出が生々しい為に、春山は新人のトレーニング程度の山行をと考えていたが、日が経つにつれて再び未知なる領域を求める烈しい登高意欲が起り、前々から話のあった黒部へ入る事になった。黒部の横断は仙人ダムのある所で行うのが普通であるが、我々は昨夏の偵察の際に僅かに可能性を見出した下の廊下での横断を目論んだのである。実際には計画の不備、メンバーの不足等によって偵察程度に終わったが之は当然の事かも知れない。たゞ之が手掛りとなって今后黒部へ入る気運でも開ければ目的は達すると考えている。

過去を振り返ってみる時、我々は先人の残した手掛り足掛りを基としてより高い山への道を歩んで来た事を知る。そして一つの学校山岳部に於てその生命は、常により高い山への努力によって維持され、かゝる努力の結果積重ねられた経験はやがて伝統となり、その部に所属する者がすべて染まる一つのカラーを形成して行く事が分るのである。阪大山岳会が、古い母体から新しい意義を持って結成されてから既に五年、もはや一つのカラーが出来つゝある。もしこのカラーに単に安住するだけならば、それは次第に色褪せたものになってしまう。伝統を打破しカラーを塗りかえようとする意



志と努力こそ、カラーに深みと鮮明さを与えるものである事を忘れてはならない。

(終)



# 冬山鹿島槍東尾根合宿 (一九五四年)

坪井圭之助

一九五五年春に懸案の黒部横断剣往復のポーラをひかえて、この今迄にない大規模のポーラーの実施に対して、我々の冬山の経験は一部上級部員に限られてゐた。特にこの春山には大人数の完全なボッカが成功の条件であつたし、又このボッカに下級部員を使用するとすると、当然ここに強力な中監が必要になって来た。このため特に荷上、高所露営に重点を置いたトレーニングを目的とした冬山が計画されるに到つた。

## 計 画

春山に主眼が置かれていたため冬山は直前まで未決定でできたのは一二月に入ってからであつた。今回の山行の目的から云つて大規模のバリエーションは考へられず、どの尾根を対称とするかで種々議論された。後立東面各尾根と八ヶ岳と考へられたが、結局所要日数、アプローチ、尾根のレベル、キャンプが二三箇所設営し得る等の点と、更に白馬主稜に始まつた一連の後立に於ける我々の登攀の最後に残された尾根として鹿島槍東尾根が決定された。しかしながら尾根が決められた後になつて問題となつたのは、一体どこへ登頂するかと云うことであつた。実さい東尾根そのもの即鹿島槍往復はこの方式では満足できないし、さりとて爺は遠く且低い、五竜はキレットと距離の点で考へざるを得なかつたが、結局問題となる第3キャンプの位置が北槍頂上ならば五竜往復も可能と考へて之を主とし、C3の如何により南槍又はキレットの往復に終るも止むなしと結論した。けだし第一、第二両岩峰の通過が文献に於いても荷上の形では全く未知であつたからである。

従来この尾根はラッシュの対称とされて居たけれども、我々は之を国境稜線への足場と考へたわけで、従つて雪崩をさけるためにも完全に末端よりトレースし第一、第二岩峯も直登する事にしたのである。

具体的には一一月下旬の偵察により、B・Hを冷沢—大川沢出合(一〇八〇)とし、C1を一八〇〇米附近、C2を第一岩峯直下(二三七〇)、C3を荒沢頭(二七一〇)より北槍(二八三〇)間に設置することにし、第一、第二岩峯はボッカのためザイル固定を行うことにした。パーティ編成は3名づつ3隊に分けアタック隊を先頭に後続隊は一キャンプづつ後れて前進、アタックはC3(三名)、C2(六名)同時に出発、各々五

竜、南槍往復することにした。キャンプは全部テントによることにし、ナイロン一、二号大高テントを用いた。

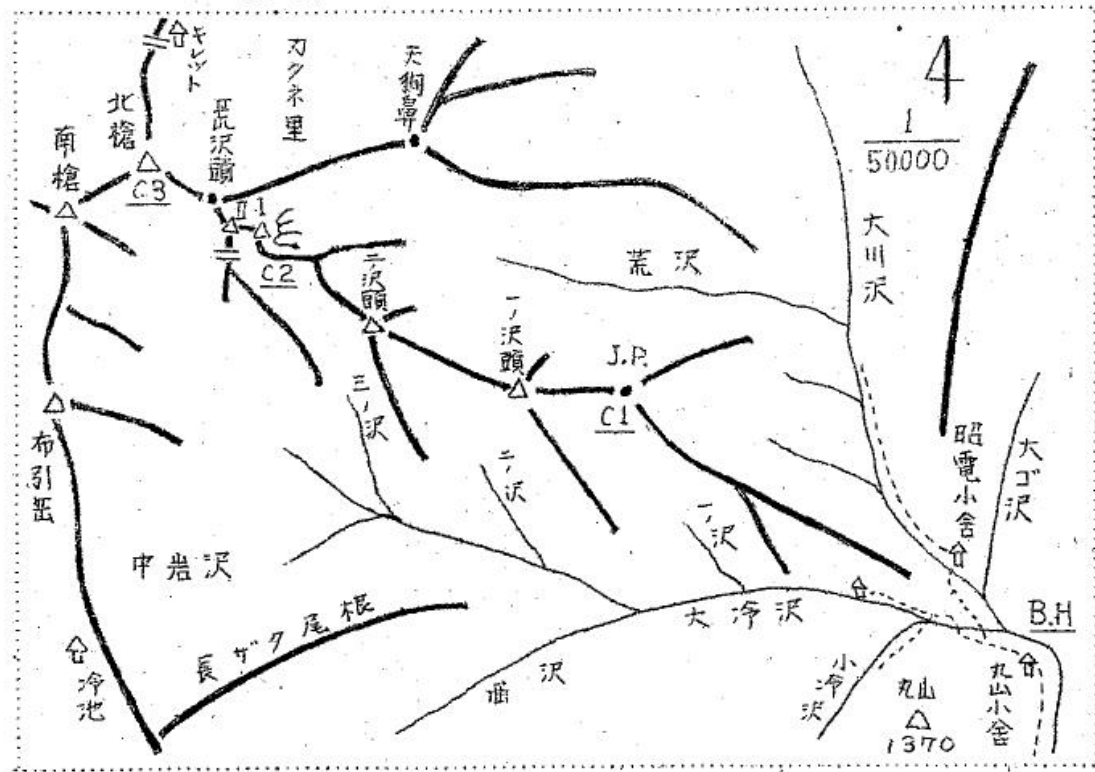
計画日数については、稜線に於けるアタックは四日の内一日は晴があると判断し、四日計上、東尾根上部に於ける行動日は二日の内一日は必ず行動し得ると考え正味全日数八日に対し最大一四日とした。

大要以上の如く計画し、一、キャンプ運営の迅速化、二、食糧、パッキング、荷上の合理化を主眼として実施した。

参考文献としては関西学聯、神大、法政、立教、鵬翔、岳人の報告をさんこうにした。

尚東尾根上部の地形については陸地測量部のもの又各文献の地図共全く相互関係高さはデタラメであるため寫眞、スケッチを参考にして之を判断した。

鹿島槍東面、東尾根概念図



# メンバー

坪井圭之助 (L)、広橋茂 (会計)、三枝礼子 (記録)、木村裕一、空中勝、鷺沢忍、関本靖治 (装備)、山本進一郎 (食糧)、川島勇 (OB)

## 行動記録

一二月二五日 (晴) (先) 大町—大川沢出合昭電小舎

先発隊、広橋、空中、大町着、午後鹿島入、本隊大阪発

一二月二六日 (晴后曇后小雪)

本隊大町着バスで源汲へ、ばかに荷物が多いので源汲へ二往復、昭電小舎使用不能のため、丸山小舎に入る。積雪二尺。

一二月二七日 (雪) 本隊、小舎 (二・〇〇) —デポ (四・二〇) —小舎 (五・三〇)。木村、鷺沢 (一・三〇) 着、鹿島往復。川島先輩 (八・三〇着)。

丸山小舎が満員で向ひの飯場に午前中移動。午後偵察兼ボッカに一四〇〇米附近まで登る。登路は大冷沢昭電取入口の手前より右手の土堤を越え沢をつめる。登り切ると平坦な台地になり、こゝより尾根に平行に高度を高め暫くして右折約一時間で尾根に出た。我々は大いにラッセルを予期したのであるけれども、四五日前に京大脇坂君のパーティが通過した後で殆んどラッセルもなくトレース出来た。夜食糧計算の結果砂糖不足の爲、明朝三枝嬢に大町へ買出しに行ってもらふことにする。九時川島先輩着全員集結。

一二月二八日 (晴)

BH (八・〇〇) —デポ点 (一〇・〇〇) —C1 (二・〇〇)

C1 建設に快晴の中を出発。デポ点より上は本格的ラッセルになった。一八〇〇米、尾根が急に広くなった当り、森林中に C1 設営、一号と大高テントを入口を向合せに張る。之は全く都合がよい。連絡出来ると尚よいのだが。関本、広橋を BH に帰し残りは再びデポ往復、坪井、木村、山本、空中、鷺沢、川島 C1 に入る。

一二月二九日 (晴后雪)

C1 六名、C1 (八・〇〇) —C2 (二・〇〇)

山本、鷺沢、川島、C2 (二・三〇) —C1 (五・三〇)

BH 3 名、BH (一一・〇〇) —C1 (三・〇〇)

朝やけで午后のくずれを予想させたが、一気に C2 建設せんものと出発。一の沢頭の手前ヤセ尾根になった所で始めて第一、第二岩峯なるものに見参、その圧倒的高さと傾斜に一驚した。一の沢頭二の沢頭間は殆んど雪屁は発達して居らず、木株にワカンを取られながらも快調に通過。途中のコブで京大パーティを抜く。二の沢頭附近より天候くづれ始めたためピッチを上げ荒沢尾根分岐点で晝食、ここより完全にトレースなく更に天候益々悪化猛風雪になり始めたため、坪井、木村のみ荷物を持ち、残りはデポしラッセル隊を編成、目前の小岩壁を左にまき完全な雪のナイフリッチを一丸となって突破、第一岩峯直下 C2 予定地に坪井、木村がリッチの曲角に斜面をけづつてナイロン 2 号設営、残りは再デポ往復、坪井、木村、空中 C2 に入り残りは又吹きすさぶ風雪の中を C1 に下った。一方 BH より関本、広橋、三枝 C1 へ入る。

一二月三〇日（風雪）

C2 三名、停滞

C1 六名、C1（一〇・〇〇）－C2（四・三〇）

内関本、広橋、鷺沢 C2－（四・四〇）－C1（七・三〇）

C2 は風雪のため停滞、C1 六名は雪の中を C2 へ移動を敢行し夕刻 C2 着。川島、三枝、山本 C2 へ入り、関本、広橋、鷺沢再び C1 へ下る。

一二月三一日（曇后雪）

今日は岩峯のザイル固定と決めのんびりかまえていたら早朝より、九大、京大パーティ、キャンプ前を通過、あわてて飛び出したが何しろせまい尾根の事で順番を待つ始末。旧帝大三校が一尾根に会すとは珍しい事だ。

東尾根のナイフリッチが第一岩峯の南大斜面に直角に交はる点の東側 5 米位に荒沢へ落ちるルンゼを京大の荷物つり上げを左に見て木村が約六〇米ザイルをカンバの木に固定し、之を登り切った後は第一岩峯頂上まで広大な雪の斜面を直登、雪がしまつて居らず非常に苦しむ。第一、第二の間のコルで九大隊に追いついたが、其の頃より天気くづれ始め雪がちらつき出した。ここより先は細い岩尾根が約四十米ゆるやかに続き更に約三十米の岩壁となって第二岩峯を形している。下部の岩稜に四十米固定し、更に上部は直登が不能のため、せまいテラスを左に六、七米移動、小さなガリを越え、斜下につき出た一枚岩の下端を空中にのり出す様にして回り一枚岩の上に出たが益々激しくなる吹雪に思うにまかせず、三〇米固定して荷上げも短時間で通過し得る見通しを得て荷物はコルに置き C2 へ帰った。C1 関本、広橋、鷺沢 C2 着。これで全員 C2 に再び集結、明日は全員で C3 建設に向うことにする。

一月一日（雪）

C2（八・三〇）－第二岩峯（一一・三〇）－北檜頂上 C3（一二・四五）。サポート隊 C3（一・三〇）－C2（四・〇〇）

昨日の見通しもあり天気は良くなかったけれども、とにかく第二岩峯を越すことにして出発。第一岩峯は何なく越せたが、第二は以外に手間取り、後はただ登るほど強くなる吹雪の中を先頭のラッセルに従う。全くどの辺に居るかさっぱり分らない。一段と急斜面を登り切った所で見覚えのある北檜頂上に出た。折から我々を祝福するかの様にガスの中から五竜と劔が顔を見せた。

風の中で大至急晝食をすませ、頂上のほゞ真中に新鋭ナイロン二号をはる。雪が固まらないので張線がはりにくい。設営后サポート隊は明日の成功を約して C2 へとガスの中へ姿を消した。

一方後に残った C3 隊はテント整備を壜中にまかせ、坪井、木村キレット偵察にすぐ出発、一度コルへ降り夏道通りトレース、キレットの入口は簡単に発見、針金を出してキレットへ、小舎まで行くつもりで北側の岩壁を登り始めたが又天気が悪化しさうなので上部のピトンに補助ザイルを固定、大急ぎでうす暗いキレットを抜け出し走る様に C3 に帰った。途中より猛烈な吹雪になり、北檜のすぐ下で二三度迷ってやうやく C3 に飛込んだ。

所がテントの中とは云へこの後立の風にはナイロンテントも無力だった。やはり防風壁を作るべきだったか、ラジウスをいくらつけても全然暖くならない。おまけにシラフがぬれているとあつては全くすばらしい元旦の夜だった。

一月二日（風雪） C3、C2 共停滞

相変わらずの吹雪。テントの黄色い布地はどうも具合が悪い。何時見ても外が明るく陽がさしている様に見えるごまかされる事甚しい。

晝すぎシラフを乾かすためラジウスを点火中過熱のため安全弁のハンダが融けて使用不能になった。壜中が頭をしぼったがなほす方法がない。全く予期しない事ではあったが萬事キューすである。一日や二日ならこのままで細々で行けるが只でさへも悪い条件で更にラジウスがないとなると之は考えざるを得なかった。起った事は小さかったけれども、その影響は甚大であった。全く心臓を止められた様なものだ。我々は計画を放棄して明日下りねばならない。C2 より川島先輩、三枝、山本、下山。

一月三日（風雪）

C3 隊、C3（一〇・〇〇）－C2（二・〇〇）。C2 停滞。

夜が明けても風雪は一向衰へていない様だ。今日も恐らく C2 からの連絡はないだらう。火がない恐ろしく寒い。心残りながら意を決して撤収開始。何も見えない。テントの支柱が凍って抜けないので、そのまゝリュックの上へのせ全くトレースの消えた尾根を腰までもぐりながら下りる。第二岩峯を慎重に下り、こゝより凍傷にかかりかけた空中を先行させ、C2 隊を呼びにやる。残りでザイルを回収、雪崩の出さうな第一岩峯の南斜面をゆっくり下り、出て来た C2 隊に下のザイルを頼み C2 に入った。夜は帰着祝で盛大にゴチソーし、久しぶりのラジオのオトミさんに正月気分をひたる。あの寒々とした、すべてがぬれて凍った C3 に比べるとまるで天国の様に感じられた。

一月四日（快晴后曇）

C2（一一・〇〇）－BH（五・〇〇）

夜半一二時すぎより吹き出した風は物凄かった。短いインターバルを置き、一瞬地鳴の如き前奏と共に襲い来る風に対して我々は全く風前の灯そのものであった。支柱は波の様にゆれ、布地は風船の如くふくらんだ。半時間位で先づナイロン一号の支柱折れ、テントたほれ、続いて二号もペグが抜け倒された。恐らく瞬間風速三、四十米位はあったであらうか。只皆支柱をかかえて風の止むのを待つのみだった。四時すぎ風おさまる。

夜が明ければ全くの快晴、今はもう二次アタックの望全くなく、寝不足の眼をこすりながらのんびりと撤収準備、ひる前 C2 発、往きのラッセルの固められたバーンは夜来の風のため反対に雪面より飛び出し、アイゼンを快適に効かして存分に後立を眺めながら、途中 C1 のテント撤収、往きと異なり取入口の上手に出る小ルンゼを半分滑りながら下り、夕刻 BH に入った。

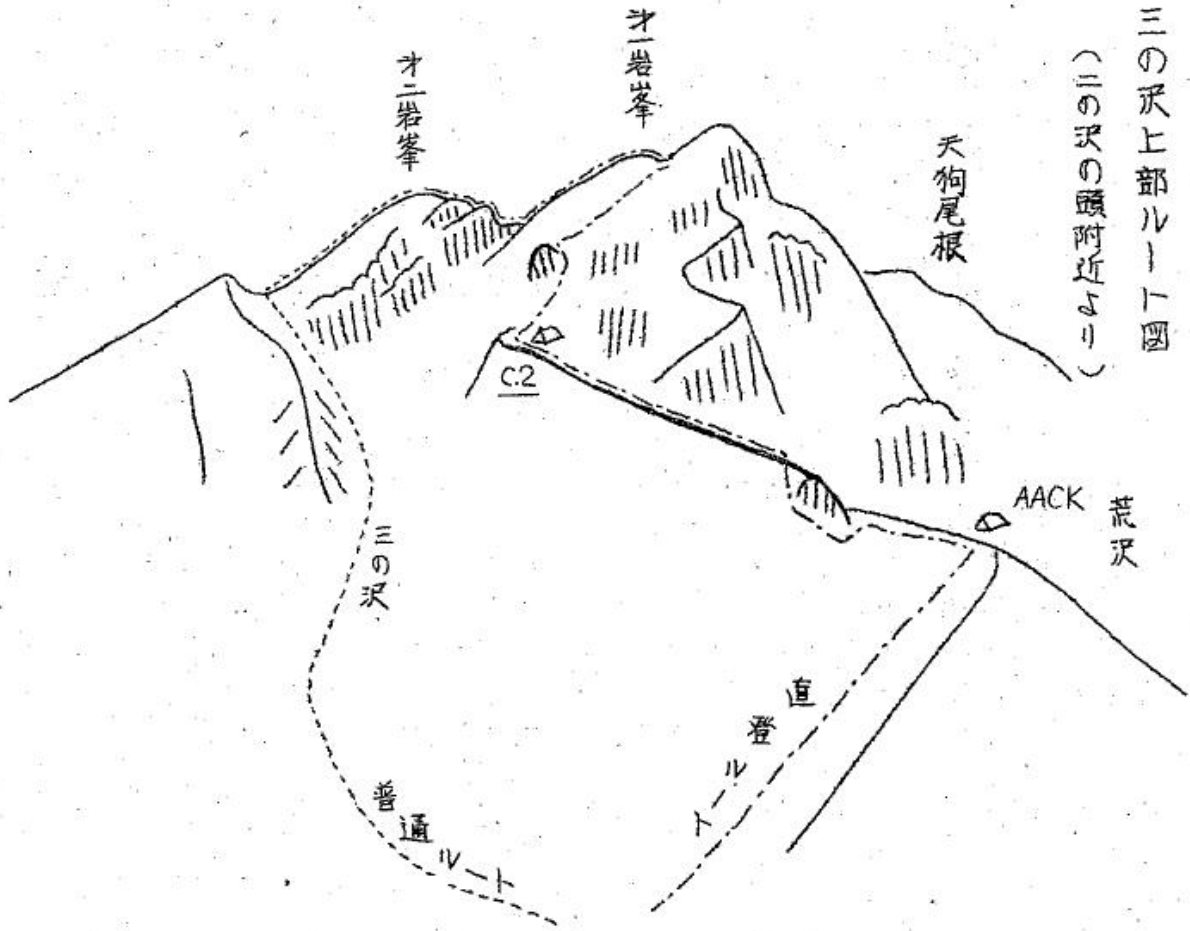
一月五日（雪）

BH（八・〇〇）－鹿島－大町。

小雪の中をスキーを引張って鹿島へ、トラックで大町へ出た。

三の沢上部ルート図

(二の沢の頭附近より)





# 東尾根行動表

大鹿出B.H. C.1. C.2. オニ岩峯下 C.3. 北槍 五竜  
町島合 1080 1800 2370 2830

12月 25日 曇	2 →					
26日 小雪	4 → → → →	1400				本隊出合着
27日 雪	2 → 1 →	5 →				1400 テポ
28日 晴	1 →	6 → 2 →			オニ 岩峯	C.1 建 6人入ル
29日 晴后 風雪		3 →	3 → ← 3			C.2 建
30日 風雪			3 → ← 3	3 →		キ レ ット
31日 曇厚雪			3 →	6 →		オニ岩峯往復 ザイルフック入
1月 1日 雪				3 → ← 6	2 →	C.3 建 キレット ザイルフック入
2日 風雪	←		3 →	停	停	ラジクスコケレ 3名下山
3日 風雪				← 3		C.3 撤収
4日 晴			6 →			C.2, C.1 撤収
5日 雪	← 6					

# 春山合宿

宍戸元

## まえがき

後立から春の黒部へという、我々の願望は年と共に高まっていった。昨春冠松次郎氏の記録を頼りに、新越沢を下り、黒部を横断しよう考えたのは、今にして思えば、あまりにも安易な計画であり、黒部の急流を樹間にわずかに望見するのみで敗退したのは、むしろ当然のことであった。

そこで五四年の我々の課題は、

- (一) 後立山から黒部への最良のルートであり、
- (二) 横断地点並びにその方法
- (三) 横断後に通過する内蔵助沢の偵察である。

これらの解決のため夏一回 (L 尾藤 OB)、秋二回 (L 宍戸、L 坪井) の偵察隊を出し、その結果、

- (一) 鳴沢尾根を使用する。
- (二) 鳴沢出合の吊越を使用する。もし不能なら樹を切って橋をかける。
- (三) 横から出る雪崩さえ注意すれば、本谷自体雪崩れることは考えられないが、行動は夜間に限る。

という結論に達し、秋には全ルートのトレースを行い、吊越には補助ザイルをフィックスするなど、一応は問題は解決出来たものとしたが、こゝに大きなミスが潜んでいたわけである。

春山に際しては、今年のメンバーから考えて、昨年の横断計画を剣往復に拡張した。そこで BC と五つの前進キャンプを進めていくに当り、複雑化を避けるために、黒部までのサポート隊とそれより先のアタック隊に分け、サポート隊は横断地点にアドバンス BC (ABC) の建設に全力を傾け、その後はアタック隊 (五名) 独力でアタック撤収をすることとし、又、根據地から長いポーターを展開するために、速やかに、且つ円滑に ABC 建設 (四十貫の荷上げ) を完了する必要がある。それ故、

- (一) 可能な限りサポート隊の人員を増し、アタック隊は少数精鋭とする。
- (二) 従来必要性を痛感しながら、実行しえなかった食糧の梱包を完全にし、ボツカを円滑にする。

ABC 設置まで長期間耐えうるよう荷上げするが、必要な場合はサポート隊を下山せしめ、C2 からでもアタック隊独力で行動可能にする。

以上のような要旨によって計画を樹てた。

## 計 画

### ○アタック隊

宍戸 元 (CL)、木村裕一 (SL 会・食)、坪井圭之助、西川元夫 (装)、尾藤昭二 (OB)

### ○サポート隊

木村裕一 (L)、西川元夫、三枝礼子、山本進一郎、四方大中、岡田博司、寺田満洲郎、村瀬泰弘、和田 〃、東 〃 雍 (OB)

### ◇アタック隊の任務

ABC 建設後

I ABC－内藏之助平 (C4)

II 内藏之助平－ハシゴ段乗越 (C5) (真砂沢までの偵察)

III アタック (長次郎谷をつめて)

IV C5、C4 撤収、ABC に戻る

V ABC 撤収、C1 に戻る

VI C1 撤収、BH に戻る

### ◇サポート隊の任務

大沢小屋を BH として、ABC を建設し、C1 にアタック隊用帰途食糧をデポし、C2 C1 BC を撤収する。

## 行 動 記 録

三月一八日

実に繁雑極りない最期の梱包をすませ、サポート隊第一陣 (西川、岡田、寺田、村瀬、東 OB) は午後大町発。初め予定していた黒沢小屋は営林署の人夫がはいっているので使用出来ず、寄沢の飯場小屋迄ボッカする。籠川林道は雪融けで、大出からは車も橇も使用出来ぬ悪条件のため、予定通り荷上げ出来ず、全員寄沢泊。

三月一九日 (雨)

つめたい雨にずぶぬれになりながら泥沼と化した道を、大出寄沢間二往復のボッカ。実に長く感じられる道である。西川、東 OB は午後より扇沢出合少し下手まで偵察を兼ねて、ボッカしデポしてくる。黒沢から上は全く雪に蔽れていて歩きやすい。寄沢までのボッカ完了。

三月二〇日（雨）

豪雨について大沢小屋（BH）までの第一回ボッカ。木村、三枝、山本昨夕大阪発でサポート隊第一陣に合流する。

三月二一日（雨のち曇）

三日目の雨は停滞、皆の顔がほころぶ。東 OB、山本は連絡の手違いで木村などがボッカする筈の荷物が大町に取残されたため、取りに行くが、途中、大出で自動車で荷物を運んで来た宍戸と連絡がつき、三名で寄沢までボッカ。全員十一名寄沢小屋に合流なる。

三月二二日（晴のち曇）

二日の遅れを取りもどすべく、大馬力をかける。全員で大沢小屋までのボッカを完了するが、天候は少しも回復の徴がない。しかし後立山縦走以来三度訪れる大沢小屋になつかしさがわいてくる。小屋の中の雪も処理され、居心持のよくなった小屋から、明るい話声が針の木谷に響き渡っていく。

三月二三日（小雪）

雪が降ってはいるが明るく、視界もきよ、小屋の前に出ると、岩小屋沢岳の稜線が望見出来る程である。行動か、停滞か、一番判断に迷ういやな天気である。兎に角、登りうるところまでボッカをしておくに越したことはないと思い、予定通り出発する。BC の位置は一昨春の後立逆縦走の時の新越雪洞地点（時報 5 号参照）にする。緩傾斜で風雪によりすぐ雪洞の入口が埋没する危険性があり、それで一昨春もにがい経験をしたのだが、他にそれ以上の候補地がないので止むを得ない。ラッセルに時間を喰って BC 到着が遅れたのでデポ用の小さな雪洞をほる。その間雪に風も加って来たので木村、三枝、村瀬、岡田、四方、寺田、和田、東 OB を下山させ、宍戸、西川は風雪の中かなりの苦心を払ってナイロン二号テントを張る。なほこの日坪井、尾藤 OB 大町より大沢小屋にはいる。

三月二四日（快晴）

久し振りに見る青空、BC の二人は夢中でシャッターを切る。剣、立山、遠く日本海も見える。信州側は一面の雪海で、その上に針木、蓮華が浮き出ている。宍戸、西川は予定に従い C1 までのトレース。鳴沢のトラバースは古い雪と新雪がなじんでいず緊張を要す。

木村、三枝、山本、四方、岡田、村瀬 BC にはいる。尾藤 OB、東 OB、坪井、寺田 BC 往復 BH に帰る。和田停滞。

三月二五日（風雪のちガス）

停滞、たゞしBHの五名はBCに上る。これで全員BCにそろろう。

三月二六日（晴時々ガス）

風をつめたい日である。全員でC1までボッカ。宍戸、西川、山本はC2に進み、他はBCに帰る。サポート隊員とは大阪までさようならだ。

三月二七日（快晴）

C2の三人は真近に見える黒部別山、その下に白く光って岩と岩との間を流れている黒部にテントを出るなり眼を奪れる。しかも今日は、その待望の積雪期の黒部の河原に降り立つことの出来る日だ。鳴沢尾根の末端から鳴沢に降る傾斜は、高度が下がったためか腐った雪に悩まされ、それに加えて密生した樹林帯、このためしばしばルート判断を誤らされる。偵察隊のつけた鉋目を発見してホットする。午後〇時鳴沢出合に着く。吊越は滑車が対岸の雪に埋って簡単に動きそうでもない。何かしら心も重くC2に帰る。東OB、村瀬、岡田、四方、寺田はBCよりC1にはいる。尾藤OB、木村、坪井はBCよりC2、三枝、和田はBCより大町に下山する。

三月二八日（C1……風雪、C2……雨）

停滞

三月二九日（快晴）

山本が單身C1に引返し、C2には宍戸、木村、西川、坪井、尾藤OBの五名だけとなったためか、幾らかリーダーの重責も軽くなったような気になったのが間違いだった。朝は早出を原則とする、山の戒律が破られ出発したのは九時を過ぎていた。もっとも昨日の朝でぬれた物を乾したり、今日明日の二回に分けてボッカする荷分けのために閑とったのも事実だったのだが……。尾根末端の特長のある馬の背様の岩（これを我々は馬の背と呼んでいるのだが）を越えて鳴沢側に向って森林帯の急斜面を下って行く。左手にはべたっと雪のついた猫の耳が西洋のオトギの城郭の如くそびえている。一昨日のトレースは雨のため跡片なく消え去って、雪のくされ方は更にひどくなっている。坪井、尾藤、木村、西川、宍戸の順に降る。坪井は一昨日の偵察隊にこそ加っていないが、夏、秋の偵察に参加してこのルートを切り開いた熟達者でもあるし、オーダーは別に決めていなかった。このような腐れ雪と草つきのため、皆は慎重に一步一步足場を作って降って行く。高度のバランスを要求する岩と氷のコンビネーションの穂高の稜線よりもかえって神経を疲労させるということがつくづくよくわかる。トップの坪井は自己の技術を信用してか、ともすれ

ばピッチを上げ、後の四人との間を開ける。彼れがとある小ルンゼのトラバースを始めると見るや、ざっーという音と共に姿を消してしまった。「坪井、坪井」と云う尾藤 OB のドラ声が樹々に響いた。「おーい」と下から元気な声が返って来た。草つきの上に薄くかぶった雪に足をとられて転倒、ピッケルで制動をかけながら十米位のオーバーハングの岩のため、体の中に投げ出されてその岩の上で止ったらしい。四人は元気な声を確認してオーバーハングの岩を左にまいていやな草つきを下降し、奇蹟的に元気な姿を見てホットする。しかし、彼れのボッカしていた大半の食糧（食パン三十斤）とザイル 2 本はリック共そこから一直線をなして鳴沢大滝の上に落ちるルンゼを落ちていってしまった（以下棒沢と呼称）。しかもバウンドしながら落ちたためか、そのトレースすら判然としない。我々はとり合えず周囲に残っていた眼鏡、帽子等を拾って、兎に角一旦正規のルートである我々の末端尾根と呼ぶ尾根に戻り鳴沢を下からつめてリックを捜すことに決め、○時鳴沢出合の C3 予定地に到着することが出来た。しかし、鳴沢大滝まで出合から予想外に遠いのと、C2 に数百米登らなければならない負担を荷った我々は十分な捜査も出来ず重い足をひきずって C2 に引上げた。（略図参照）

三月三十日（晴のち曇）

鳴沢大滝を登ることは非常に困難であることを昨日の捜査で悟り、昨夏からの偵察などで比較的この辺りの地理に明るい尾藤 OB、宍戸、坪井が空身で棒沢を降れるところまで降っていくことにし、木村、西川は C1 にデポしてある食パン三十斤をとりに行く。食料は例え失っても当座の食糧に困窮をきたすこともなかったが、篠田部長、新保先輩の心盡しのナイロンザイルは部として是が非でも発見しなければならない大切なものである。昨日のオーバーハングから下に、二つの滝がある。初めのはどうやら左岸をまいて下れるが、二番目の滝は 2 つに別れて、一つは鳴沢大滝の下に、一つはその上に続き、どちらも到底降りそうもない。岳樺に登って下を見ると大滝を音もなく幾條かの白糸のように水が流れその先は眞暗なシュルンドの中に消え去っている。我々のリックもそのシュルンドの中に吸い込まれていったのではないのだろうか、それらしきものも見当らない。

三月三十一日（雪のち晴）

積雪が多いとリックの発見も殆んど不可能になるのではないかと気をもませたが、ほんの数糧で止んでほっとする。予定通り C3 を設け、じっくりと腰を据えて捜索に当ることにする。坪井はリックがないためにサブを使用した無理なパッキングの

ためか、又同じ場所でガソリン罐（約三升）を落とす。これもリックと同じ運命をたどった。燃料はもはや数日の滞在しか我々に許してくれない。

四月一日（雨）

燃料を考えると一刻もじっとしてられないが、雪崩を警戒して停滞。

四月二日（曇りのち晴）

今朝までの間に新たなデブリがでた。こゝと思はれる所をシャベル掘り返して見たが、小さなデブリとは云え、五人の人力と一個のシャベルではとても及ぶものではない。搜索を打切ることにする。一方、黒部の渡河工作も見切りをつけ撤収に五人の意見が一致する。

四月三日（晴のち曇）

C1 まで撤収。

四月四日（風雪）

気温いちゞるしく下がるが、燃料が豊富でない今では十分な保温も出来ない。

四月五日（快晴、風強くつめたし）

我々の遂に到達し得なかった剣に雪煙が舞い上っている。BHに戻る。

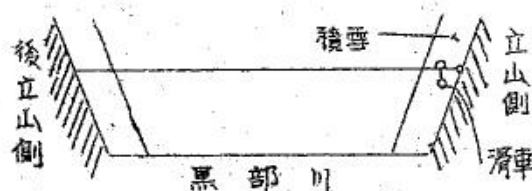
四月六日（快晴）

黒沢の営林署の小屋も間近になると黒い土が、今まで周囲に雪の壁をはり巡らしたような黒部生活、水の音と、雪崩の恐怖と、共すれば我々を押し去らうとする、過酷な大自然の中から抜け出して、単調で長い籠川林道を歩いている。只の同じ大自然がこゝでは黒い土を現し、小鳥の声と温い空気で微笑みかけている。もう、大出のバスの停留所も間近だ。

## あ と が き

春山に於ける失敗の原因としては、

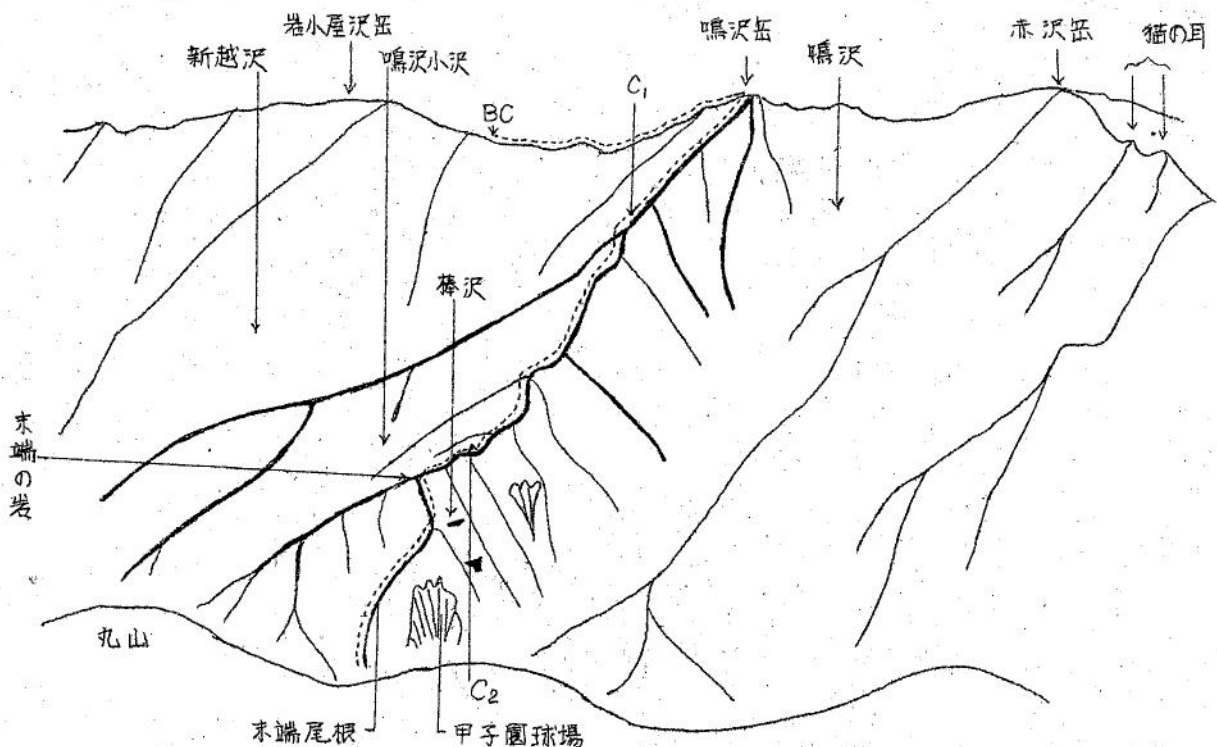
一、黒部横断点に於ける認識の不足である。我々は鳴沢出合の吊越を唯一のものとして信頼し、他の横断の対策を講じなかったのが大きな原因であった。現実には吊越は予想外に多い雪のため（下図参照）使用不能だった。立木を伐採して架橋するような事は黒部のスケールの前にはもろくもついえ去った。又、吊越も滑車がなければ絶対に渡れないこと



も今後のためにも強調しておきたい。黒部を（鳴沢出合で）横断するには吊越が必要な条件であらう。

第二には、リック（食パン三十斤、ザイル二本）とガソリン罐を一人の隊員のスリッパによって失った点である。せめてザイルを二人で分担してボッカしていれば、事故後の捜索に於いて効果を上げ得た。しかし食糧に関しては、各学部の都合でサポート隊とアタック隊に分けた変則的なポーター形式を取らざるを得なかったためと、我々が始めて経験する長いポーターのために、あらゆる場合を想定して綿密な計画を樹てたので事なきを得た。

実際に鳴沢出合に立って、一三〇〇米という低い高度であるのに雪量の多いということは常に念頭に入れて置かねばならない。それも稜線に於けるような粉雪とか、クラストした雪と異って、その雪は靴をずくずくにしてしまうような湿った重い雪である。このような雪が不安定な場所に不安定に乗っている際のテクニックを熟知している必要があるのではないかと思はれる。



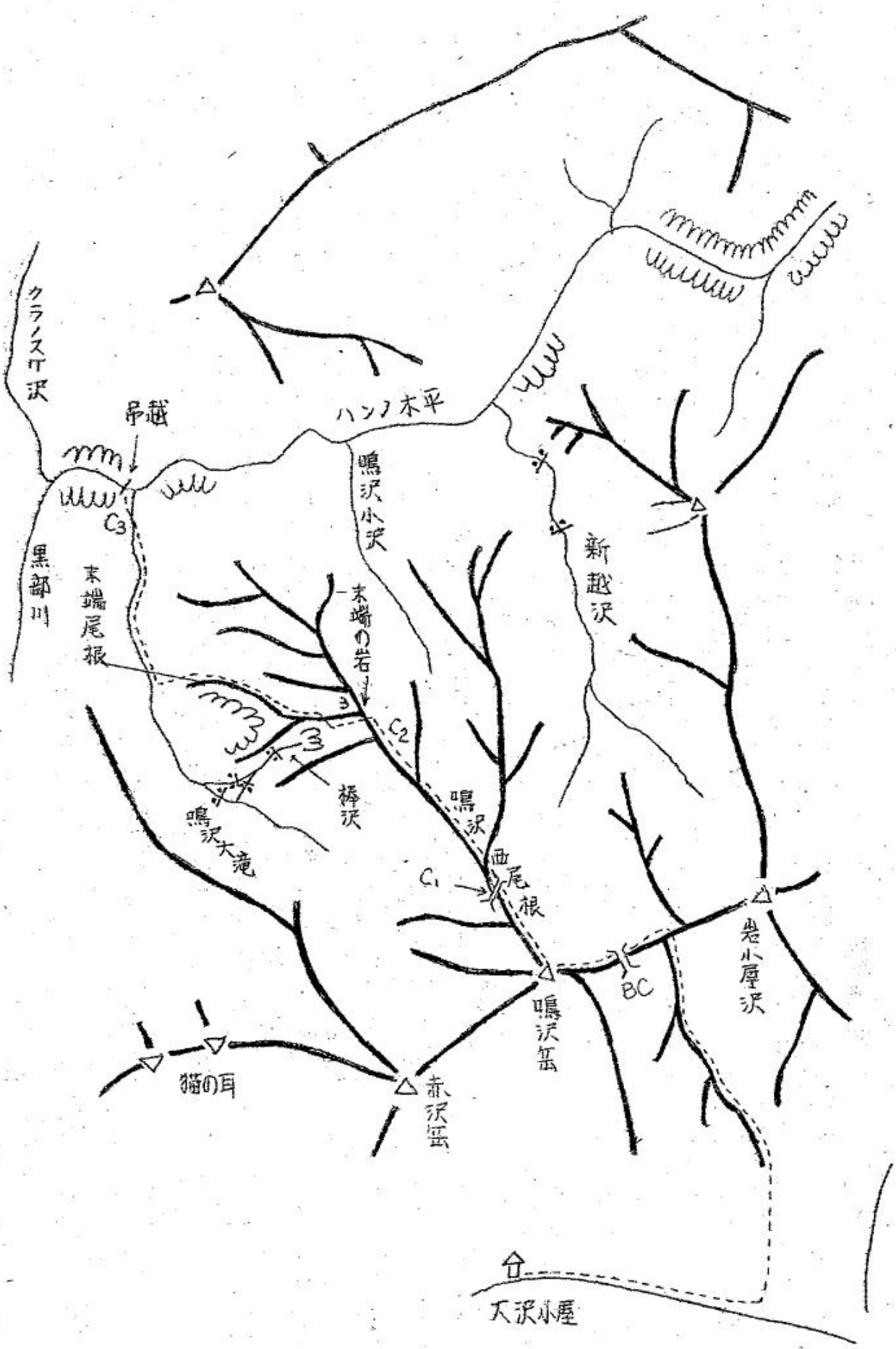
鳴沢西尾根略図

----- 春山トレース

1954.10. 真砂岳より

穴戸元





# 春山合宿行動表

鳴沢尾根 (2350m) C<sub>1</sub>    鳴沢尾根 (1550m) C<sub>2</sub>    鳴沢出合 C<sub>3</sub> (ABC)

大町 大出 寄沢 大沢 BH 新越乗越 BC

日	大町	大出	寄沢	大沢 BH	新越乗越 BC	鳴沢尾根 (2350m) C <sub>1</sub>	鳴沢尾根 (1550m) C <sub>2</sub>	鳴沢出合 C <sub>3</sub> (ABC)
III 18	7			扇				
19	7 5		2	沢下				
20	3		7					
21	1	2	停8					
22			11					BH設
23	2		2 9					BC設
24			停1	6 4	2			C <sub>1</sub> 復
25				5	停6			
26					10	3		
27		2				3 3	3	C <sub>3</sub> 復
28						停5	停6	
29					1 5		5	
30		6				2	3	
31							5	C <sub>3</sub> 設
IV 1							停5	
2							沢大滝 5	
3							5	
4						停5		
5					5			
6		5						

# 春山食糧報告

木村裕一

食糧計画を進めて行く上の骨子を説明すると、大沢小屋までの朝夕の主食は米とし、一つのキャンプ内の献立は繁雑を避ける爲に同一とした。しかし原料は同じでも異なったものが作れるから少しも飽きることはなかった。晝食はフランスパン、ビスケット、クッキーにチーズ、マーマレード、マーガリンジャムとバアラエティを持たしたのは成功だった。副食としては豚肉を毎日一人当り十匁を食することとし、野菜はキャベツ、ホーレン草、人参、ネギを配した。玉ねぎは高値なので中止した。

積雪期の食糧計画として本年度に特に採り上げた問題が二つあった。一つはパッキングの完備と、停滞食の設定であった。パッキングから報告すると、先づ段ボール箱とセメント袋とポリエチレンを用意した。そして各キャンプ毎に食糧を包装した。そして一個の包装に出来ないキャンプのものは二つ又は三つに分けて重さの配分も考へた。セメント袋は C2 までの食糧をつめ、それ以遠は停滞食と共に段ボールを使用した。又食パンはポリエチレンに包み、それをセメント袋につめて縄をかけた。そして各包装の袋に〇〇用と明記して運搬の時に備えておいた。食パンの袋までもそうしたので荷上の時は仕度の出来次第、次のキャンプの、更に次のキャンプの食糧をスムーズに背負って出かけることが出来た。今一つの利点は各キャンプに於ける献立に飽きる頃には次のキャンプを設営完了ということになって、新しい献立にありついてそれが部員の士気にも影響をもたらしたということである。勿論、計画を立てるに当っては、キャンプが進むに従って御馳走が出て来るようにすることも忘れなかった。計画としては段ボールの大きさやその重量までも均一にし、昼食も一食又は二食を単位としてポリエチレンで包んで置かうとしたが実際的には不可能に近く、準備が煩雑になるばかりなので中止した。包装自体の効果としては食パンが薄片に切つてあつたに拘らずいつもよりも原型を保っていた。しをれた野菜が消散するようなことがなく、包装の解いていないものはテントの外に放つておいても心配がいらなかった。只パッキングをする爲には食糧計画を相当厳密に樹てなければならず、荷造りに想像外手数を要した。しかし一旦正確に樹てておき、包装の中に献立表と一人当り分量を書いて入れておくと、数パーティに分れた場合食糧係が居らなくても苦勞するようなことはない。

最初の実施にあたって、段ボールの型により担ぎにくいのが出来たり、或部員のキスリングにしか入らないのがあつたという不手際やフランスパンとホーレン草を同居

させて、パンがぐにゃぐにゃになったという喜劇もあったし、C1で塩が不足し、C3の包装をバラして取出したということもあった。未完成ではあるが包装を採りあげてみて感じたことは、運搬の爲の包装は完璧を期待することは出来ても、各部員の一日分を一単位としたりするようなことは経費が重なり、準備が煩雑になるばかりで、困難でもあり、又その必要もないと思へるのである。

#### 次に停滞食についての報告

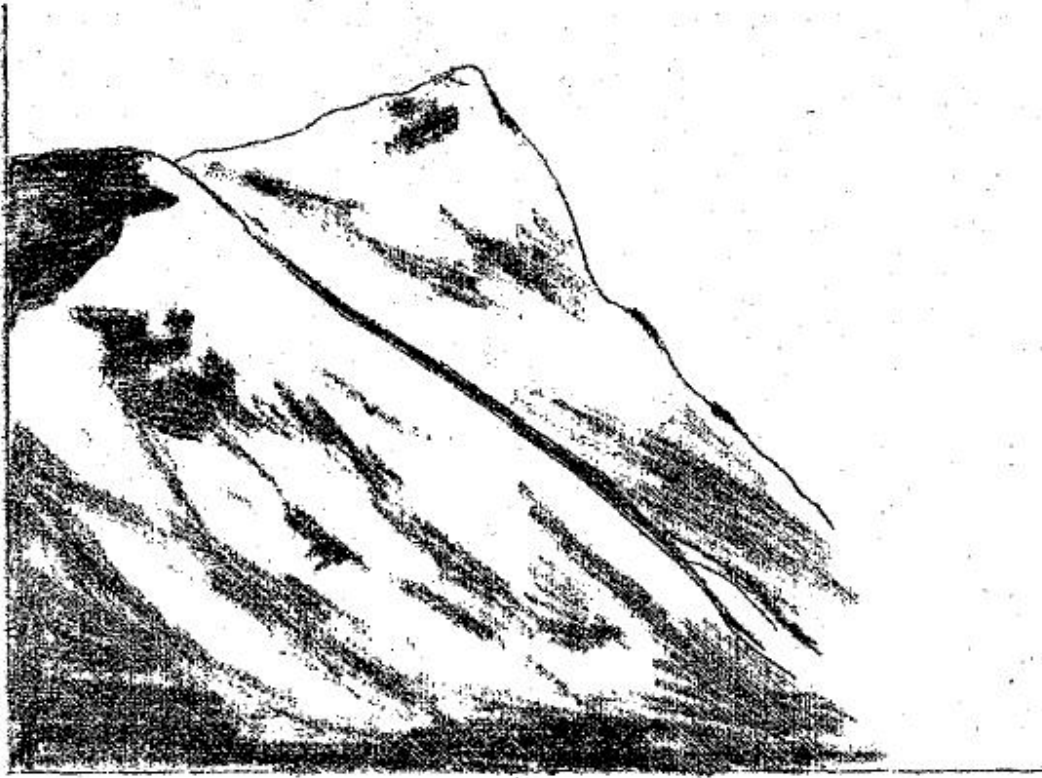
今まで停滞日を見込んでも献立は行動日と余り異なるところがなく、幸ひにして停滞日が少なかった時はそれを捨てて来るのは常だったのを停滞食という新しい献立を作り、そのロスをなくし停滞日の慰安を出来るだけ多くしようと考へたのである。

先づ、停滞日四日(?)に対して二日は少くとも朝から行動することはないであらうと想定し(完全停滞日)その日は二食とし、費用は行動日と同額又はそれを少し上廻る額とし、時間をかけてもよいから美味しい献立にした。こゝに原料を上げると、乾うどん、中華そば、漉しあん、粟おこし、羊羹、チョコレート、おかき、ピーナツバター、豚肉、etc. である。

これをアタック隊二日分、サポート隊二日分をそれぞれパッキングした。これは部員を非常に楽しませ、期待を抱かせて効果があったようである。アタック隊の方は行動日でも消耗した日には中華そばをラードでいためて、士気の回復に役立ったし、サポート隊では、下山一日前に一度に開けて、大さわぎをしたとかいうことであつた。又アタック隊は嗜好品という意味で米を二升用意し、黒部の水で炊いて喰った味は忘れられない。

今春山は喰った者の感じとして大変ぜいたくをしたような気がするのであるが、これには菓子類を松屋町で、その他のものは天満の卸売市場を利用したのがあづかって力があつたようである。

以上で散漫な報告であります春山食糧報告を終わります。最後にパッキングの費用として、特に先輩から一阡四百円、新保OBからポリエチレンを三〇米頂きましたことにつき厚くお礼申し上げます。



## ◆ ナイロン二号テント製作報告 ◆

昨年のナイロン一号の使用の結果ナイロンテントの優秀性が立証されたし、又春の  
劔往復等の大計画のポラーの実施に当っても是非ナイロンテントをもう一つ作りた  
いと考へていた所、幸にも篠田先生よりナイロン生地の御提供をうける事になったの  
で本式に作る事になった。資金面は昨年同様先輩の御協力による事にし製作は同じく  
美津濃の新保先輩にお願いした。

十一月頃より製作開始、支柱その他で色々と新保さんに御迷惑をかけながらも冬山  
直前に完成、すぐ冬山に使用したが何分生地、費用の点で制約があるため完全なもの  
でなく、色々缺点も露呈したが全体として軽量、機動性の点で非常に優秀であり、ア  
タック、縦走ではすばらしいと考へられ、之に更に内張、防水の強化等が補へれば完  
全なものになるだらう。

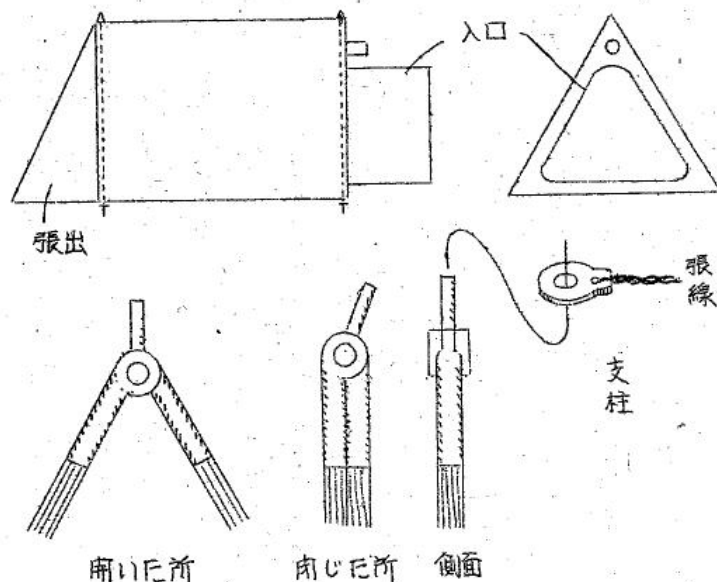
以下要点を報告する。

- (1) 用途 最前線キャンプ用
- (2) 形 生地の量より三人用ミード型張出付に落ちついた。
- (3) 生地 マナスル隊のテント地（黄色）一〇ヤール、ヤッケ用厚手（紺色）一三  
ヤールを用ひ、入口と張出しは黄色を用ひたが色のバランス、強さ上のバラ

ンスは良かった。防水はシリコン防水、底だけでもビニールコーテッドすべきだ。

- (4) 重量 テント支柱共、五・五キログラム。
- (5) 大きさ 入口の大きさは一辺一・五米の正三角形。長さ一・八米。張出しは〇・六米。入口の長さは〇・九米。
- (6) 支柱 一号と同様テント内側式にし、天井支柱は止め、二本組合せの交点は簡単なコンパス式にして突起に張線をかける様にした。支柱はトンキン。非常に簡単で能率よく吹雪中でも二人で十分位で設営可能である。支柱そのものはチュラにすべきで、継目は凍結に対しては更に研究すべきである。
- (7) 入口 従来に比し非常に大きくし形を正三角形とし、巾は二人並んですわれる様にした。巾着式。出入にさいして非常に便利である。
- (8) 張線 ナイロン張線。四隅の張線の内、中間の高さのものは支柱がある以上不要であらう。
- (9) 内張 費用の都合上今回はつけなかったが、必ずつけるべきである。保温と同時に水蒸気の再び結晶して落下する害が余りにも大である。
- (10) 掃除孔 入口のそばに一尺平方のものをつけたが撤収時又掃に役立つ。
- (11) ベンチレーションは入口の上のみにしたが、両端にすべきだらう。

一般的に云って軽量で使い易い。殊に入口と荷物用張出しは良かった。缺点是生地の関係上天候判断を誤り易い。又黄色の生地は本来ビニールコーテッドすべきもので風が入る。内張りはここにもつけるべきだ。 (坪 井)



# 山行記録

一九五四・七～一九五五・六

## ○体育科剣登山応援（七月一六日～一八日）

松久先輩、木村、杵中

一六日（雨）美女平—地獄谷温泉

一七日（晴）地獄谷温泉—雷鳥沢—別山乗越—剣往復—別山乗越小屋

一八日（晴）別山乗越小屋—池の平—阿曾原—宇奈月

## ○夏山合宿（七月二〇日～二八日）

後立を知り盡した先輩も殆んど卒業してしまった。現役の間に一度は後立の合宿生活をするのも有益なことと考え南股合宿を計画した。なほ南股に関しては時報三号「南股概説（大島輝夫氏記）」を参照されたい。

宍戸（CL）、木村、広橋（会）、三枝、杵中、鷺沢（装）、山本（食）、石沢、辻川、高木、岡田、村瀬、四方、寺田、佐谷、大村（OB）、細見（OB、途中より）

### 二〇日（晴）

細野、丸山与兵衛氏宅で食糧、その他の準備ののち、黒菱まで上る。

### 二一日（晴）

唐松、旧発電所中継小屋跡に幕営、宍戸、木村、広橋 d ルンゼまで南股への下降路偵察に行く。

### 二二日（晴）

木村、杵中、山本、関本を先発させ、I II 峯間ルンゼの偵察、兼ボッカ。他は唐松黒部側カールでグリセード練習ののち、同ルンゼより全員、唐松沢、不帰沢出合のBCに入る。

### 二三日（晴）

三峯偵察、木村、山本。

二峯偵察、杵中、鷺沢。

南滝より南股取入口方面、大村（OB）、関本。

不帰キレットのデポよりボッカ、宍戸他

### 二四日（晴）

三峯Cアタック（初登攀）、木村、広橋。

二峯東南稜阪大ルート、杓中、鷺沢。

唐松直接尾根、宍戸、西川。

*a* ルンゼ、関本、山本。

I II 峯間ルンゼより白馬鍵往復。

大村 (OB)、村瀬、四方、佐谷、岡田、寺田、三枝。

二五日 (晴)

二峯東南稜阪大ルート、広橋、山本。

二峯ルンゼ 1、鷺沢、岡本。

南滝方面、木村、杓中、四方。

*d* ルンゼ、宍戸、岡田、寺田。

*e* ルンゼ、大村、村瀬、佐谷。

*a* ルンゼ、西川、石沢、高木。

細見 (OB) 単身白馬より *a* ルンゼ經由 BC 入り。

二六日 (ガス)

南滝方面、木村、辻川、細見 (OB)。

不帰沢、西川、三枝。

その他停滞。

二七日 (雨)

停滞。

二八日 (ガスのち雨)

*a* ルンゼ經由、唐松、八方尾根より細野へ下山。合宿解散。

(宍戸記)

○黒部下廊下偵察行 (七月三〇日～八月二日)

尾藤 (L)、坪井、東、小澤、杓中。

七月三〇日 (雨)

大町 (一二・〇〇) - 冷澤中途の取入小舎 (一六・〇〇)

七月三一日 (雨後曇)

取入小舎 (九・〇〇) - 冷池 (一八・三〇)

八月一日 (晴)

冷池 (一〇・三〇) - 棒小舎沢に下り立つ (一五・〇〇) - 鹿島槍沢出合より少し手前で幕営 (一八・三〇)



冷小舎より棒小舎沢に向って下る踏跡を少し下ると、地図にそれと分る小沢に出る。これは途中二ヶ所小滝を越え、更に末端の五米程の滝は右岸を伝って容易に棒小舎沢に下り立つ事が出来た。此の辺りで既に棒小舎沢は広々とした河原になっていた。

八月二日（晴）

テント（八・三〇）－西沢小沢との出合（一二・〇〇）

広い河原を二、三度浅い渡渉をくり返し、牛首沢出合を過ぎると間もなく急に河中が狭められる。右岸を伝って行くと、行く手は、屏風のように両岸が流れに直角に立ちはだかり巾三米程の屏風の間には流は狭められた。これが有名な滝だなどと思って右岸の屏風を木につかまり這ひ登って向ふ側を見下ろすと、なんと其処には関電の立派な小舎を見付け全く驚いて了った。午後遊んでしまふ。

八月三日（晴後雨）

棒小舎沢を下ってみたが、必死になって下る気構へでなければ無意味だと分った。京大脇坂氏一行も十字峡から来られた。

八月四日（晴後曇）

キャンプ（九・三〇）－十字峡（一四・三〇～一五・三〇）－ハンノ木平（一九・三〇）

このコースで見るべき所と言へば、先づ劔沢大滝の遠望、十字峡、出来れば棒小舎沢落口の滝、神タン及び其処へ下られた冠氏のルート、白龍峡、黒部別山沢、大へつり、下廊下唯一の渡渉点（黒部別山沢出合少し上手）、新越の壁及びその滝などが中心とならう。ツリ越ワイヤーは十字峡下手及び新越沢出合と鳴沢小沢出合との中間それから鳴沢小沢出合、鳴沢出合とに在る。

八月五日（晴）

杓中、先に下山。四名にて御前沢出合まで遊ぶ。

八月六日（晴）

昨日の散歩より、春の横断点として鳴沢出合を最も有力とし、本日、尾藤、坪井は出合のツリ越を渡り鳴沢に入り、鳴沢岳より出て鳴沢右岸を爲してゐる尾根の末端（一八五〇米）まで登り、春の登降路としての偵察を行った。（九・〇〇－一九・〇〇）

東、小沢は鳴沢大滝まで往復。

八月七日（晴）

尾藤、坪井は鳴沢小沢出合のツリ越を渡って鳴沢小沢右岸の切開きを一七〇〇米まで登る。東、小沢は内藏助平往復（九・〇〇—一八・〇〇）。

八月八日（晴）

大ダテガビンの中途（約一六〇〇米）まで登って、鳴沢の右岸をなしてある鳴沢尾根及び鳴沢小沢の右岸をなしてある鳴沢尾根を鳴沢岳よりその末端までを遠望して、その前者の方が容易である事も確めた。私達の偵察は先づツリ越のある場所、即ち鳴沢小沢出合及び鳴沢出合を春の横断点と想定した。が、其処より内藏助沢出合までの部分及びツリ越使用不能を考へると鳴沢出合の方が有利なので、一応鳴沢に下るルートを考えて。次に、鳴沢両岸の尾根より鳴沢に下る斜面は、左岸の方が遙に傾斜が少く、且つ左岸尾根末端の方が右岸尾根より高度が低いので極めて条件が良い訳なのだが、右岸尾根末端まで登ってみると、何とか春の登降が出来るだらうといふことが分った。所が主稜線よりの状態を遠望すると、左岸尾根は赤沢岳より出発するもので赤沢岳に近い部分は非常に傾斜が急で而も鳴沢右岸をなす鳴沢尾根より遙かに長いものであった。恐らく春にはBCとなるであらう新越乗越の事を考へ合せると、一層鳴沢尾根の方が良いと言へよう。かくして此処に新越乗越より鳴沢岳に登り鳴沢尾根を下って、その末端より急斜面を鳴沢に下り、その出合のツリ越を渡って、立山側は内藏助沢より内藏助平に至るルートを考えて訳だった。

八月九日（雨） 休み

八月十日（晴）

ハンノ木平（六・〇〇）—御山谷出合（八・〇〇）—一ノ越（一五・〇〇）—ミクリガ池（一六・〇〇）

八月十一日（晴）

富山に下山。

（尾藤記）

○後立山縦走（七月三〇日～八月六日）

山本（L）、石沢、岡田、村瀬、四方、三枝

三〇日（曇りのち雨）

細野（九・〇〇）—黒菱小屋（一一・四五）—唐松小屋（一六・一五）

三一日（ガス午後雨）

唐松（八・〇〇）—白岳小屋（一二・一〇）

一二時頃小雨が降り出したため停滞。

八月一日（晴午後ガス）

白岳（七・〇〇）－五竜頂上（一〇・一〇）－キレット小屋（一一・四五）－鹿島  
槍釣尾根（一六・一五）

二日（晴夕方ガスタ立あり）

釣尾根（七・〇〇）－南槍頂上（一〇・一〇）－冷小屋（一一・四五）－種池小屋  
（一五・〇〇）

三日（晴午後ガス）

種池（七・〇〇）－鳴沢岳（一〇・〇〇）－赤沢岳（一一・一五）－スバリ岳北側  
のコル（一二・三〇）－スバリ岳（一四・〇〇）－針ノ木岳（一五・〇〇）－針ノ木  
峠（一五・三〇）－蓮華岳（一四・三〇）

四日（晴のちガス）

蓮華（七・三〇）－北葛岳（一一・〇〇）－船窪小屋（一四・〇〇）

蓮華の下りは下に行くほど、ガラガラで感じが悪くなる。最も下には、真直な  
針金がたらしてあるが利用法には少々首をひねる。北葛の上り以後、道は全く稜  
線通り正しく可成り急に上り下りして肩ともピークともつかぬものが次々に現れ、  
信州側からガスが立ちこめて来て視界がきかず位置がはっきりしないまゝ中食を  
とる。七倉岳と船窪岳とのコルに船窪小屋あり。小屋から二～三〇〇米ばかり不  
動沢へ下ると岩の間から樋をひいた水場がある。小屋から更に十五分余り最低鞍  
部に到り、縦走路から直角にブッシュの中を北側に十分ほど下ると汚れた小さい  
雪田があり、更に五十米ばかり下に僅かに砂の間から湧水あり。縦走路からは全  
くわからない。狭い場所をならしてやっとテントをはる。

五日（晴東側ガス）

船窪（九・〇〇）－船窪岳（一〇・三〇）－不動岳（一四・〇〇）－南沢岳（一六・  
〇〇）－烏帽子四十八池（一六・三〇）

所々梯子や針金がつけてある可成り急な上り下りを繰り返す中、不動沢の断崖  
に沿っていた道は次第に木立の間をゆるやかに縫う様になる。不動から先は東側  
のガスも晴れて気楽に歩き、不動南沢の間で長時間休憩する。

六日（曇のち晴）

烏帽子四十八池（七・〇〇）－烏帽子小屋（七・三〇）－葛温泉（一三・〇〇）

（三枝記）

○第二次黒部下廊下偵察行（一〇月一二日～二二日）

宍戸（L）、佐谷、住吉（OB）

黒部を境界として立山側と後立側と二分して分担して春山の偵察を行うことに決し、その立山側の偵察のため内蔵助沢を下る。

一〇月一二日 大阪発

一〇月一三日（雨のち曇）

新設なった立山ケーブルに乗って藤橋から美女平に九分で到着。建設中の自動車道路を弘法にむかう。弘法を過ぎた辺りから新雪が積っている。大日、立山が真白になっている。ラジウスを持って来なかったのが惜しまれる。追分小屋泊り。

一四日（晴）

新設が照りかゞやき実にきれいだ。天狗平では最早スキー可能である。積雪が多ければ偵察も断念しなければならない。地獄谷に泊り空身で雷鳥沢を登ることに計画を変更す。

一五日（晴）

四時起床。再び計画を変え、別山乗越小屋泊りの予定で出発。正午に到着。乗越は劔沢から風がすき抜けて、まだ寒さになれていない皮膚に恐ろしく寒く感ぜられる。午後から佐谷をキーパーにして、宍戸、住吉（OB）で真砂岳まで内蔵助平上部の偵察を行う。内蔵之助平、後立は、全然雪はなく、木立が紅と黄色に包まれている。予定通り内蔵之助にはいることにする。

一六日（晴）

劔沢はクレバスの上にもうすく新雪がつもってその在りかをわからなくしてしまっているのが非常に危険だ。アン・ザイレンしてコンティニアスで下る。真砂沢出合で、積雪圏から急に紅葉にうつるのが興味深い。ハシゴ段乗越を経て内蔵之助平につく。

一七日（曇）

前日遅く着いたので、朝寝坊。午後丸山側に若干登り、内蔵之助平を一望に収める。

一八日（曇）

内蔵之助沢を下り、御山谷小屋に行く。関電の小屋番に珍客とばかり歓迎をうける。

一九日（晴）

岩魚を釣って御馳走からとの言葉に甘え、一日休養をとる。夜の岩魚の塩焼きは実にうまい。

二〇日（曇り一時雨）

平、針の木谷を遡り針の木小屋に泊る。

二一日（曇）

大町に下山。

(宍戸記)

○第三次黒部偵察（一〇・二五～一一・三）

坪井（L）、西川、戸井、田島（OB）

黒部以東鳴沢西尾根偵察のため鳴沢岳より黒部鳴沢出合迄下りて見た。

一〇月二五日 大阪発

一〇月二六日 晴

大町（三・三〇）－白沢出合（七・〇〇）

一〇月二七日 晴

白沢（八・〇〇）－扇沢（一〇・〇〇）－大沢小舎（一二・三〇）－針之木小舎（六・〇〇）

一〇月二八日 晴后曇

[坪井、西川] 針之木小舎（八・〇〇）－針之木岳（九・三〇）－鳴沢岳（二・〇〇）－鳴沢尾根二・三〇〇米（四・〇〇）。[田島、戸井] 針之木小舎（九・〇〇）－平小舎（五・〇〇）

荷物が多いので二隊に分ける。稜線に雪はない。鳴沢頂上より這松の大木の中を苦勞して下る。夜半より雪。

一〇月二九日 晴

[坪井、西川] 出発（八・〇〇）－ハンの木平（七・〇〇）。[田島、戸井] 平小舎（九・〇〇）－御山谷小舎（一〇・三〇）午後ハンの木平往復。

昨夜の新雪約二寸。新雪に滑りながら森林中を下降。別に岩場もなにもない細いかなる尾根である。一八〇〇米附近で夏のナタ目発見。ザイテングラードにかゝってから意外に手間取り、タヤミの中をツリ越を渡る。小舎は屋根全部はづしてあった。

一〇月三〇日 曇后雨后雪

[坪井、西川] ハンの木（七・〇〇）－御山谷（九・〇〇）田島隊と合流

坪井、西川、田島再びハンの木平往復、夕刻より風雪となる。

一〇月三十一日 雪

御山谷 (二・〇〇) - 平小舎 (三・三〇)

吹雪のため一ノ越をやめザラ峠越えることに決め、平に移動。積雪約一尺。

十一月一日 晴

平 (六・〇〇) - 刈安峠 - ザラ峠 (一二・〇〇) - 立山温泉 (四・〇〇)

刈安・ザラ間道悪く雪二尺、久し振りのラッセルに大いに苦しむ。ザラ峠三尺。

西を見てホッとした。

十一月二日 雨后曇

立山温泉 (八・〇〇) - 富山

十一月三日 大阪着

(坪井記)

○雪彦山 (十一月三日～七日)

壱中 (L)、立花、岡田、大西

三日 大阪 - 姫路 - 山之内 - 雪彦山。

四日 地蔵谷、洞ヶ谷

五日 三峰。立花帰る。

六日 雪彦山 - 七二四米峠。壱中帰る。

七日 峠 - 上小田 - 峰山高原 - 暁晴山 - 太田池 - 南小田 - 寺前 - 大阪。

(岡田記)

○木曾駒 (十一月四日～八日)

宍戸 (L)、石沢、村瀬、片山、部外者二名。

四日 大阪発

五日 上松 - 金懸小屋。

六日 金懸小屋 - 頂上宮田小屋。

七日 頂上附近の散歩。村瀬他一名帰る。

八日 頂上附近は風雪、千疊敷カールを経て飯田線宮田に下山。

○御在所山 (十一月七日～八日)

高木、椎木

七日 湯の山 - 御在所三角点 - 武平峠 - 鎌ヶ岳頂上 - 武平峠 - 山の家。

八日 山の家 - 武平峠 - 雨乞 - 杉峠 - 根の平峠 - 朝明溪谷 - 湯の山。

(高木記)

○八ヶ岳 (一二月二〇日～二五日)

広橋、辻川、岡田、久保 (OB)、住吉 (OB)、山本 (OB)、部外者一名

二〇日 大阪発。

二一日 松原湖駅－松原湖－稲子小屋－本沢温泉。

二二日 本沢温泉－夏沢峠－硫黄岳－赤岳－本沢温泉。

二三日 本沢温泉－夏沢峠－東天狗岳－渋の湯。

二四日 渋の湯－笹原－茅野－奈良井－鳥居峠－奈良井。

二五日 大阪着。

本沢温泉の手前から雪が見え始めた。夏沢峠からアイゼンをつけたが、快晴で風も無く稜線の上においても積雪は三〇～四〇糎程度で、その上ラッセルがしてあったので眺望も十分楽しみながら快適な山行が出来た。

(岡田記)

○鹿島槍東尾根冬山偵察 (一二月二二日～二五日)

坪井 (L)、三枝

二二日 大阪発 (二三・一〇)

二三日 大町－源汲－鹿島－大川沢出合－小冷沢出合 (二〇・四五)

二四日 小冷沢出合 (八・二〇)－高千穂平 (一一・三〇)－爺子岳北ピーク (一四・三〇)－西沢出合 (一六・二〇)－キャンプサイト (一七・〇〇)

東尾根のとりつきを観察しながら大冷沢を遡る。東尾根のスケッチをしたり写真をとったりしつつ、ナガザク尾根を登る。

二五日 (小雨) 小止みの時を見計って東尾根を一四〇〇米辺りまで登ってみる。一時半頃帰途につく。大町発にて帰阪。

(三枝記)

○大峯山 (一二月一日～二日)

岡田、他四名

一日 大阪発－吉野山上駅。

二日 百丁茶屋－山上ヶ岳－柏木－大阪。

(岡田記)

○冬山合宿

◇鹿島槍東尾根合宿 (本文参照のこと)

◇関温泉スキー合宿

宍戸 (L)、細見 (O、OB)、石沢、辻川、村瀬、岡田、四方、戸井、高木、  
加藤 (OB)、大島 (OB)、部外者六名

スキー練習に一斉を傾け、雪中露営等の他の登山技術の訓練は春山にゆずると  
いう方針のもとに新人部員のスキー合宿を居住性のよい一般旅館に合宿を求めた  
わけである。

二五日 関温泉着。午後平地滑走練習と緩傾斜滑降。

二六日 ヤブの中の登降。横滑り、全制動斜滑走。

二七日 直滑降、横すべり、クラゲターン。

二八日 前日の繰返し。

二九日 赤倉往復。

三〇日 総練習。合宿解散。

三一日 大島 (OB)、宍戸、石沢を除いて帰阪又は細野にむかう。

(宍戸記)

○関温泉残留組 (一二月三十一日～一月二日)

大島 (OB)、宍戸、石沢

○細野スキー行 (一二月三十一日～一月四日)

加藤 (OB)、細見 (OB)、辻川、四方、木村、山本

○菅平スキー行 (一月三日～七日) 宍戸

○越畑スキー行 (一月一五日～一六日)

加藤 (OB)、細見 (OB)、宮本 (OB)、由比浜 (OB)、宍戸、石沢、三枝

○伊吹山 (一月一六日) 尾藤

○伊吹山 (一月三〇日) 宍戸、石沢、山本

○蘇武岳 (二月二〇日) 宍戸

○木曾御岳 (二月二四日～二七日)

辻川、石沢

二四日 大阪発 (一七・三〇)

二五日 (晴)

木曾福島 (七・〇〇) - 羽入 (八・三〇) - 五合目千本松小屋 (一六・〇〇)

二六日 (快晴)



小屋 (八・〇〇) - 中ノ小屋 (九・〇〇) - 一ノ又小屋 (一〇・三〇) - 八合目半  
のスキーデポ (一三・三〇) - 剣峯頂上 (三・〇〇) - 中ノ小屋 (一七・三〇) -  
千本松小屋 (一九・三〇)

二七日 (曇のち雨)

小屋発 (一一・三〇)

○六甲地獄谷 (三月一〇日) 岡田

○比良山 (三月一三日) 岡田他三名。

○春山合宿 (本文参照)

○木曾駒ヶ岳 (四月二九日~五月五日)

奎中、鷺沢、岡田

四月二九日 大阪発 (二三・三〇)

四月三〇日 (晴后曇)

上松 (九・四〇~一一・三〇) - 五合目小屋 (一七・〇〇)

五月一日 (雨后晴)

小屋発 (一二・四〇) - 上松頂上小屋 (一八・五〇)

五月二日 (晴后曇)

小屋発 (一二・〇五) - 駒ヶ岳 (一二・一〇) - 中岳 - 千疊敷ホテル (一四・三〇)

五月三日 (ガス - 風雪 - ガス)

前夜ツェルトを縫って、空木岳へ縦走すべく三時に起床し待期すれどガス晴れ  
ず。

小屋発 (七・三〇) - 宝剣岳 (九・〇〇) - 小屋帰着 (九・四〇)

五月四日 (雨)

天候悪く空しく中御所道を下山す。

小屋発 (一一・〇〇) - 駒ヶ根橋 (一五・四〇) - 赤穂駅 (一七・〇〇)

五月五日 大阪着

○北岳 (四月二九日~五月五日)

細見 (OB)、辻川、四方、石沢、小坂田。

二九日 甲府 - 夜叉神峠 - 鮎差

三〇日 鮎差 - 荒川小屋。同小屋より池山中池まで荷上げ

五月一日 (雨のち晴) 小屋発 (一六・〇〇) - 池山中池 (一七・〇〇)

二日 (晴のちガス) テント - 二、九〇〇米のピーク

三日（ガス・雪・雨） 停滞

四日（雨のち晴） テントー荒川小屋

五日（晴） 小屋（八・三〇）－夜叉神峠（一二・〇〇）－甲府

○中山（五月十四日） 岡田。

○鈴鹿霊仙山（六月四日～五日） 岡田他。



## 集 会 記 録

六月三日

- ・後立山について（宍戸）
- ・夏山合宿南股に決定

六月三日

- ・春山準備リーダー会

六月十日

- ・御在所山報告（鷺沢）
- ・夏山検討
- ・総合打合

六月一七日

- ・南股について（大島 OB）

六月二〇日 第六回總會

- ・会長挨拶
- ・OB 挨拶
- ・昨年度一般報告（昨年度川島リーダー北海道赴任のため欠席、山本 OB 報告）
- ・会計報告（代理・広橋）
- ・装備報告（代理・宍戸）
- ・二九年度役員決定（会長篠田先生、リーダー宍戸、尾藤、坪井、木村、奎中、広橋、東）
- ・二九年度計画
- ・新人紹介

・懇親会

六月二四日

・JAC 集会に於ける新保 OB の講演をきくため休会。

七月一日

・夏山準備会

七月八日

・夏山準備会

七月一五日

・夏山準備会

八月二六日 リーダー会

・黒部の偵察結果（坪井）

・冬・春山について

九月四日 夏山報告会

・夏山合宿報告（宍戸他）

・黒部の偵察行報告（尾藤）

・後立山縦走報告（三枝）

九月九日

・冬・春山相談会

九月一六日

・スキー合宿について

九月二三日 リーダー会

・冬山

・スキー合宿

九月三〇日 学期試験のため休会

十月七日 学期試験のため休会

十月八日

・秋山準備会（宍戸）

十月一四日

・ナイロンテント製作に関して（坪井）

十月二一日

・第三次黒部偵察隊準備会（坪井）

・鳴沢吊越に関して

十月二八日

・第二次黒部偵察の簡単な報告（宍戸）

・春山について

十一月一日 秋山報告会

・第三次黒部偵察（坪井）

・雪彦山（岡田）

・御在所山（高木）

・木曾駒（宍戸）

十一月九日

・春山・冬山の計画（宍戸）

・スキー映画より（細見）

十一月二五日

・第三次黒部偵察、木曾駒山行のスライド供覧

十二月二日

・雪崩について（宍戸）

・スキー合宿関温泉に決定

・東尾根偵察報告（坪井）

十二月九日

・冬山準備会

十二月一六日

・冬山とスキーの個人装備について

・スキー合宿日程発表

十二月二二日

・冬山準備会

一九五五年一月一三日

・冬山報告会（スキー合宿・宍戸、同会計報告・石沢、東尾根行動概略・坪井、同食糧報告・山本（進）、同装備報告・関本）

・ナイロンテント2号について（坪井）

一月二〇日

・春山計画

一月二七日

- ・ 第一回春山討議

二月三日 学年試験のため休会

二月一〇日 //

二月一七日

- ・ ナイロンザイルについて (先生)
- ・ 富士山遭難について (大島 OB)

二月二四日

- ・ 黒部横断を大沢小屋を BH にして剣までのポーラー形式の往復計画に変更することについて

三月三日

- ・ 春山討議

三月一〇日

- ・ 春山準備会

◎一九五五年度

四月一四日

- ・ 春山報告会 (行動概要・宍戸、装備・会計報告・木村、装備報告・西川、吊越並びにアクシデントについて・宍戸)

四月二一日

- ・ 本年度役員決定 (リーダー木村、宍戸、壺中、山本、岡本、西川、鷺沢)

四月二一日 リーダー会

- ・ 事務分掌を決定
- ・ 本年度の方針について

四月二八日

- ・ 五月山行準備会

五月一二日

- ・ 五月山行報告 (木曾駒・壺中、岳・石沢)

五月一九日

- ・ 夏山計画

五月二六日



北

・冬山、春山について

## 編集後記

◇編集者の不手際のため第VII号の発行の遅れたことを深くお詫びします。

◇創刊以来引続き、巻頭言は篠田先生に御執筆願っていたが今回は、マナスル登山隊々員に選ばれた徳永先輩に御多忙のところを特に御無理願いました。

◇今年度は大量の卒業生を出したため、昨年の華々しさはないが、我々の一年間の努力を認めていたゞきたい。

◇会員名簿はVI号の名簿をもとにして校正に校正をくり返しましたが、記載もれ、住所変更、その他間違いがありましたら至急御連絡下さい。



(S)

昭和三十一年一月	発行所	編集責任者	印刷所
大阪大学山岳会「時報」才VII号	大阪市北区常安町 大阪大学学生部内	実 戸 元	大阪大学山岳会 学部自治会内 プリント部
(非 賣 品)	大阪大学山岳会		